



両沼支部中学校長会

両沼支部について

研究の進め方について

実践発表(3校の取組)

まとめ

○両沼支部について



3

○両沼支部について

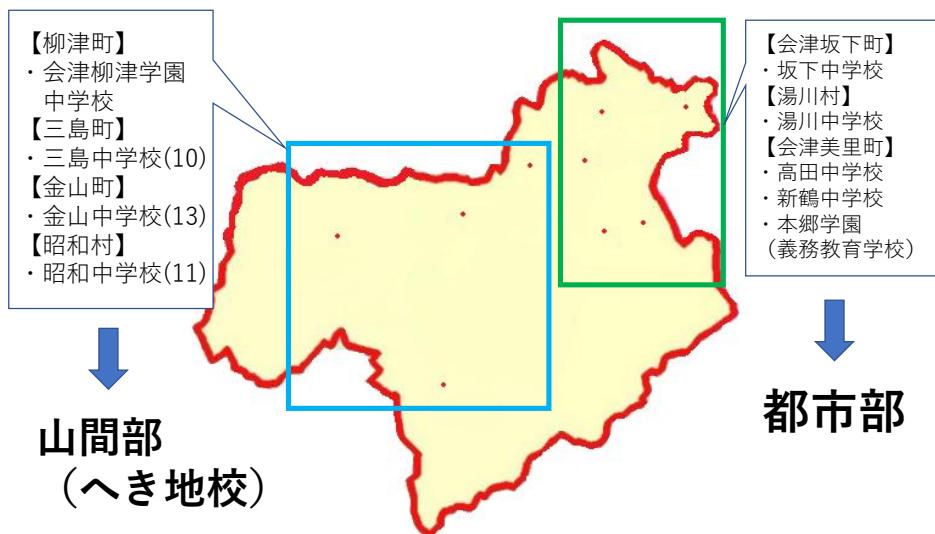
- 【会津坂下町】
 - ・坂下中学校
- 【湯川村】
 - ・湯川中学校
- 【柳津町】
 - ・会津柳津学園中学校
- 【会津美里町】
 - ・高田中学校
 - ・新鶴中学校
 - ・本郷学園（義務教育学校）
- 【三島町】
 - ・三島中学校
- 【金山町】
 - ・金山中学校
- 【昭和村】
 - ・昭和中学校



- ・7町村（8つの中学校と1つの義務教育学校）

4

○両沼支部について



・格差が大きい

5

○両沼支部について



・山間部では、豊かな自然が見られる。

6

○研究の進め方について

○研究主題 2025－2027年度

「豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手を育てる中学校教育」

第8小主題

学校と地域の連携・協働による「チーム学校」と「働き方改革」【経営課題】

小主題設定の趣旨と校長の役割（「研究の手引き」より抜粋）

- ・これから時代は、家庭や地域の教育力を生かしたり関係機関と連携を図ったりして、学校全体の教育力・組織力を効果的に高めていくことが必要である。
- ・地域でどのような子どもたちを育てたいのかなど、目標やビジョンを地域と共有しながら、「地域とともににある学校」へ転換を図ることも大切である。
- ・地域人材の活用、連携・協働を進めることで、教員の負担軽減と働き方改革につなげる意識も必要である。



研究の視点

- ① 教職員や多様な人材の専門性を活用し、組織力を高める学校経営の在り方
- ② チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方
- ③ 専門スタッフ等との連携による教員の働き方改革の実現

7

○研究の進め方について

両沼支部

○比較的小規模校が多い。

- ・校内では、生徒に目が行き届きやすい。
- ・教職員間のチーム体制が整えやすい。
- ・地域の協力が得られやすい。

▲各校の取組に格差がある。

- ・学校規模による取組の格差
- ・コミュニティ・スクールの設置

CSあり：6校
CSなし：3校



研究の方針と進め方

- ① 第8小主題「3つの研究視点」のうち、研究の視点②「チームとしての学校と地域の連携・協働体制の在り方」を中心に、研究を進める。
- ② R7前に、「学校と地域の連携・協働体制」に関するアンケートを行う。
(両沼支部の教職員が対象)
- ③ CSの有無に関わらず、アンケートの結果をもとに、自校の研究を推進する。
- ④ 研究推進校は決めずに、全ての学校が、毎年、実践発表を行う。 8

○研究の進め方（事前アンケート）について

両沼支部9校に所属する教職員を対象に、
「学校と地域の連携・協働による『チーム学校』の実現に向けて」のアンケート
を実施（R6,3）

- 1 学校と地域が連携・協働することは、大切（必要）だと感じますか。
- 2 貴校は、地域との連携・協働による教育活動の機会が多いと感じますか。
- 3 貴校が地域と連携・協働している活動の大半は、有意義な活動だと感じていますか。
- 4 地域との連携・協働による教育活動として、どのような活動があればいいと思いますか。
- 5 貴校が地域と連携・協働することで、「学校における働き方改革（授業準備等に充てる時間の確保等）」につながっていると感じますか。
- 6 地域との連携・協働が、学校の負担につながっていると感じますか。
- 7 （質問6で、4または3と回答した方への質問）
学校の負担だと感じるのは、次のうちどれですか。

9

○研究の進め方（事前アンケート）について

- 8 今後、学校が地域と連携・協働活動を進めるために必要だと思う取組は何ですか。
- 9 学校と地域の連携・協働によって、「チーム学校」が実現していると感じますか。
- 10 学校と地域の連携・協働によって、学校を核とした地域づくりが実現していると感じますか。
- 11 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の設置は必要だと感じますか。
- 12 自校が行っている学校運営協議会の活動内容を理解していますか。
- 13 学校運営協議会での意見が、自校の教育活動に反映されていると感じますか。
- 14 貴学校運営協議会を通して、地域で育てたい「こども像」が明確になっていると感じますか。
- 15 学校運営協議会によって、地域の特色をいかした活動ができるいると感じますか。



20代：9名	50代：36名
30代：12名	60代：31名
40代：15名	

合計：103名 が回答

10

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より

成果

（肯定的な意見が多かった質問）

- 地域連携・協働は、**大切（必要）**だと感じる。【99%】
- 地域連携・協働による教育活動の**機会が多い**と感じる。【87%】
- 地域連携・協働の大半は、**有意義な活動**だと感じる。【86%】
- 地域連携・協働によって、「**チーム学校**」が**実現**していると感じる。【65%】
- 学校運営協議会（**コミュニティ・スクール**）の設置は**必要**だと感じる。【67%】

課題

（否定的な意見が多かった質問）

- ▲ 地域連携・協働が、「**働き方改革**」につながっていると感じる。【35%】
- ▲ 学校運営協議会の**活動内容を理解**している。
【「2：あまり」を選んだ教職員が50%】

11

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より

【参考になる視点】

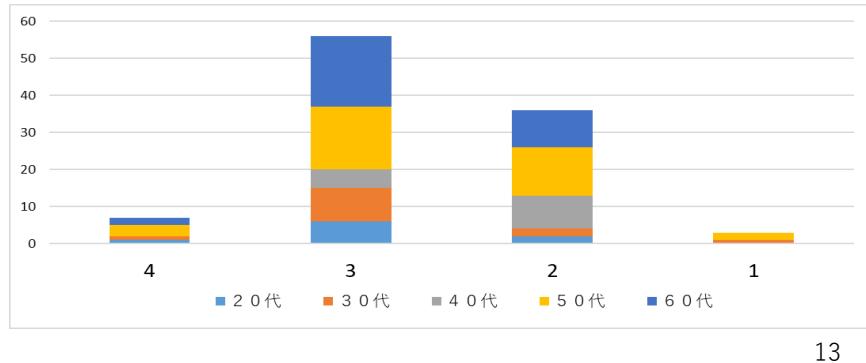
- 地域との連携・協働による教育活動として、あればいいと思う活動は？
 - ・部活動の地域移行（80/103）
 - ・授業で地域の人材や教材を活用すること（75/103）
 - ・学校の環境整備や奉仕作業：（49/103）
- 学校の負担だと感じる理由は？
 - ・日程調整などが大変（46/103）
 - ・その活動を行うための余裕がない（32/103）
- 連携・協働活動を進めるために必要だと思う取組は？
 - ・コーディネーターなど役割の明確化（54/103）
 - ・行政による学校へのサポート体制（53/103）

12

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より 【取り組んでいきたい視点】

① 学校と地域の連携・協働によって、学校を核とした地域づくりが実現していると感じますか。
(4: 大いに感じる 3: やや感じる 2: あまり感じない 1: 全く感じない)

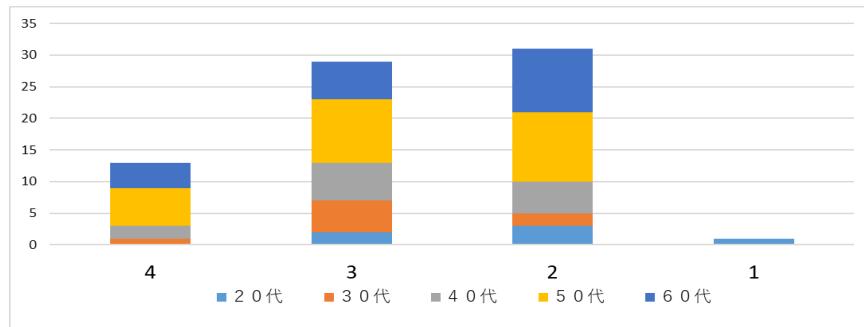


13

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より 【取り組んでいきたい視点】

② 自校が行っている学校運営協議会の活動内容を理解していますか。

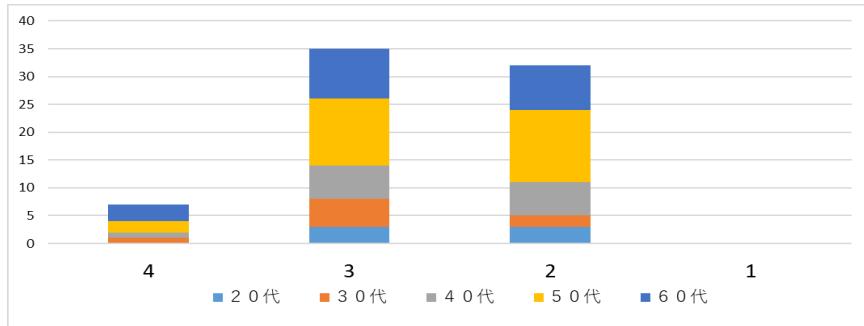


14

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より 【取り組んでいきたい視点】

③ 学校運営協議会での意見が、自校の教育活動に反映されていると感じますか。

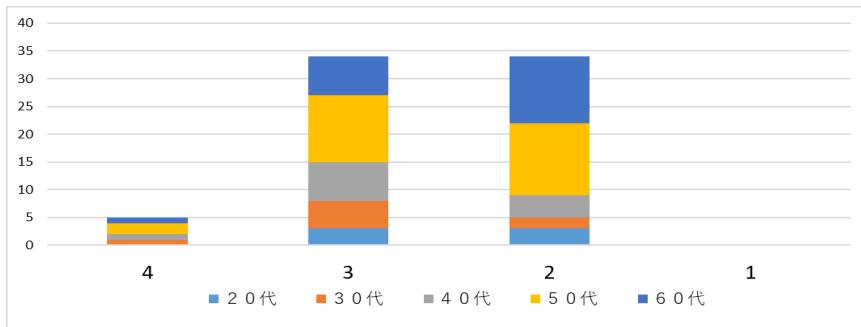


15

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より 【取り組んでいきたい視点】

④ 学校運営協議会を通して、地域で育てたい「こども像」が明確になっていると感じますか。



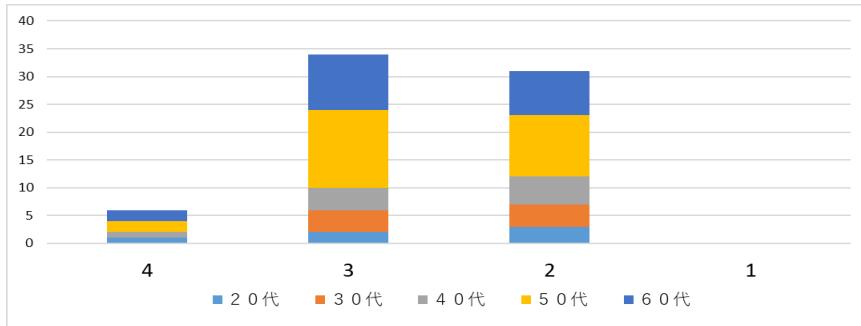
16

○研究の進め方（事前アンケート）について

アンケートの結果より

【取り組んでいきたい視点】

⑤ 学校運営協議会によって、地域の特色をいかした活動がで
きていると感じますか。



17

○実践発表

【今後の取組の方向性】

○ 教職員が「あればいいと思っている活動」をどう進める？

- ・部活動の地域移行
- ・授業で地域の人材や教材を活用すること
- ・学校の環境整備や奉仕作業



R 7までの取組

- ① 「部活動」での地域連携について 【A校】
- ② 「地域の人材や教材を活用した授業」について 【B校】
- ③ 地域と連携した「環境整備や奉仕作業」について 【C校】

18

○実践発表【A校】

「部活動」での地域連携について

◎実践の背景（要因）

①両沼地区西部（本校含む）は小規模校であるため、固定化した人間関係や馴れ合いの中で、互いに競い合ったり、多くの人と関わることが困難で社会性を育むことが難しい環境である。

②教職員の人数が少ないため多くの校務分掌を担当することになり、多忙感がでてしまう。

③部活動も卓球部しかなく生徒が自分の興味・関心に応じて部活動を選択できない状況にある。

19

○実践発表【A校】

◎実践の様子～「他校間交流・地域人材の活用」



左上：近隣中学校と兼務している音楽科講師による合同合唱練習。町村の広域連携スクールバスの運行、講師は部活動指導員として登録し、夏季休業中は合同練習を実施。

左中：合同練習により互いに切磋琢磨し、意欲の向上に。

左下：県大会出場。生徒間の交流が深まり、社会性の醸成への一助となった。

右上：地域の相撲経験者に指導を依頼。特設相撲部を設置。

右中：大会の様子。経験者による指導は意欲が高まり、真剣に稽古に打ち込んだ。

右下：地区大会上位入賞を果たす。

20

○実践発表【A校】

◎成果と課題

○公民館（教育委員会と併設）の持っているノウハウや情報を活用することで、担当教師の負担が大幅に軽減された。

○近隣校との連携は生徒が社会性を身に付ける上で大変有効であった。音楽の授業や文化祭でも交流が見られ、様々な考え方を得られる機会となった。今後も生徒会同士の交流等も深めていきたい。

▲部活動に関しては部活動指導員が配置できていない状況であり、遠隔地では深刻な問題である。

▲地域学校協働本部等の体制づくりと人材の確保が必要。

21

○実践発表【B校】

「地域の人材や教材を活用した授業」について

◎実践の背景（要因）

- ・地域に「縄文館」や「斎藤清美術館」がある。
- ・C Sにおいて、「地域の教材を活用した取組をすれば、地域愛が育めるのではないか？」という意見。
- ・学校において、「社会科の授業で活用できる」という申し出。
- ・校長として、「ただ見学して終わり」ではなく、「発展展開」させ、より深い学びになるよう助言。
- ・町として、ゲストティーチャーを派遣。

22

○実践発表

◎実践の様子～「斎藤清美術館の活用」



・美術館のスタッフがゲストティーチャーとして来校し、斎藤清の絵について説明。

・中学生が美術館を訪問し、「東北の暮らし」について、絵から学ぶ。

・県立博物館のスタッフ、地域の方がゲストティーチャーとなり、昔の生活道具や東北地方の暮らしについて、教えてくださる。

・生徒は、実際に体験したり、質問したりすることで、より学習を深めることができた。

23

○実践発表

◎成果と課題

- 地域の活性化につながる。
- 地域愛を育むことにつながった。
- 施設見学で終わらず、ゲストティーチャーとして「発展展開」することで、より学びが深まる。
- 取り組みやすいのは、全校より学年、行事より教科。

- ▲ 学校だよりや学校HPで地域への発信に努めた。授業参観なども考えられるが、発展展開すればするほど、負担も大きくなり、本来の趣旨から離れることがある。
- ▲ 「総合学習」「社会科」「美術科」などの授業が取り組みやすい。（どうしても偏りが生じる。）
- ▲ 持続性を考えた時、教師の負担につながる場合もある。

24

○実践発表【C校】

地域と連携した「環境整備や奉仕作業」について

◎実践の背景（要因）

- ・子ども達が地域の方々と共に学ぶ機会が減少している。
地域の方々の考えに触れる機会が少ない。
- ・子ども達が自分達も地域の一員であるという意識がやや薄い。
- ・C Sにおいて、
「学校と地域が共に活動する機会があれば、課題解決につながるのではないか？」という意見。
- ・学校において、
「地域の清掃活動が実現可能ではないか？」という意見。
- ・校長として、
保護者も含めた「チーム学校」全体としての活動を行うことによって、更に地域愛が深まるのではないかと助言。

25

○実践発表

◎実践の様子～

「クリーンキャンペーン大作戦」



- ・学校運営協議会長による開会式での挨拶



- ・こども園も参加した幼小中一貫の行事設定



- ・前期課程と後期課程による縦割り班での活動の実施

- ・子ども達が意欲的に活動に取り組む姿

- ・見守り隊、区長会も含めた地域との連携

- ・P T Aも含めた「チーム学校」全体の活動

26

○実践発表

◎成果と課題

- 学校、家庭、地域が一体となった活動を実施したことで、子ども達の地域の一員である意識の向上や地域を愛する心が増した。（事後アンケート 5段階評価：4. 5）
- 地域の方々も、子ども達と同じ活動をする楽しさを感じていただけた。
- 事後にCS委員、児童生徒、教職員での熟議を行い、更に良い活動にするための方策を「チーム学校」全体で深めることができた。
- ▲ たくさんの皆様に参加していただくことはありがたいが、荒天時の延期連絡などが困難な場合もある。手間をかけずに連絡できるような体制を構築していきたい。
- ▲ マンネリ化しないような内容の工夫改善が必要である。
- ▲ 行事の時だけではなく地域内で日常的に実践できるような実践も検討していきたい。

27

○まとめ

両沼地区における取組の成果

～学校と地域の連携・協働による教育活動の成果～

【生徒にとって】

- 地域との連携により、生徒の“地域社会の一員としての自覚”と“地域愛”を育むことができた。
- 小規模校“ならでは”的取組や、地域“ならでは”的取組が、生徒のコミュニケーション力（社会性）の向上につながった。
- 地域住民、保護者、大学生、専門家など、多様な人材が教育活動に参画することで、子どもたちは様々な価値観や知識に触れ、より豊かな学びを経験できる。

28

○まとめ

両沼地区における取組の成果

～学校と地域の連携・協働による教育活動の成果～

【地域にとって】

- 「熟議」を通し、“チームとして”的一体感が生まれる。
- 地域との連携により、その地域の“Well-being”につながる。
- 地元の企業や団体と連携し、フィールドワーク等を行ったことは有意義だった。（生徒の地域振興に対する意識付けとなった。）

29

○まとめ

両沼地区における取組の成果

～学校と地域の連携・協働による教育活動の成果～

【学校にとって】

- CS委員が学校行事や授業を参観し、学校理解を促進することができた。
- 目指す子どもの力（目標）について、教師の思いを地域と共有することで、地域の後押しを得られる。
- 小規模校では、実施が難しい資源回収などで地域の協力は不可欠である。

【今後の展望】

- 奥会津西部の三つの中学校の連携による交流を今年度からスタートさせたが、とてもよい交流となった。

30

○まとめ

両沼地区における取組の課題

～学校と地域の連携・協働による教育活動の課題～

【学校・教員に関して】

- ▲ 地域連携事業を、「働き方改革」につなげるのが困難。
- ▲ 地域との連携による学校行事は、休日に実施することが多く、教職員の負担が大きくなる可能性がある。
- ▲ その取組や時間を、どのように捻出するかが困難。
- ▲ 前年度踏襲（マンネリ化）になりやすい。
- ▲ 目標が漠然としすぎているため、地域と学校との連携や具体的実践に結びついていない。

31

○まとめ

両沼地区における取組の課題

～学校と地域の連携・協働による教育活動の課題～

【地域コミュニティに関して】

- ▲ 話合いはあるが、活動までに至っていないことが多い。
- ▲ CS委員が学校のことを分かっていない。（もっと知ってもらう働きかけが必要である。）
- ▲ 広報が不足している。
- ▲ 地域コミュニティの再構築が重要。
(少子高齢化により、コミュニティ力が衰退。)
- ▲ 地域の“人不足”により、実践が難しい。
- ▲ 活動を支える人材の育成や、活動を継続的に行うための仕組みづくりが重要。（特にCS運営の中心となる人材。）
- ▲ CS委員の構成が要検討である。（生徒の声も生かしたい。）

32